

大鹿村騒動記

映画「大鹿村騒動記」を見ました。この映画の主演は「風祭 善」を演じた原田芳雄さんです。原田さんは、渋味もあって、ちょい悪で本当に良い役者でしたが、残念なことに先日亡くられました。文字通り、彼の遺作となりました。

この映画には、原田さんの他にも石橋蓮司、小野武彦、岸部一徳、大楠道代など力のある役者が勢ぞろいで、見ごたえのある作品に仕上がっています。

舞台は、長野県下伊那郡の「大鹿村」です。この村は、過疎化が進み、日本の繁栄とは隔絶された環境におかれています。主人公の「善」は、この村について、「田んぼ耕して、野菜作って、鹿撃って、で歌舞伎やってんだ。何もないうっていったって、この村には歌舞伎があるんだよ。」とっていますが、それほど、大鹿村にとって歌舞伎は重要な意味を持っています。大鹿村の歌舞伎は、300年の歴史があり、戦争で男が居なくなった時も、女だけで続けてきた誇りが、今も村人を支えているといっても過言ではないでしょう。

竹下内閣の時に、「ふるさと創成事業」によって全国の市町村に1億円が配られました。大鹿村はハコ物ではなく歌舞伎の衣装にその金を使い、それが今でも村の財産として残っています。

歌舞伎の出し物は約30種あるそうですが、中でも、映画の中で上演された「六千両後日文章 重忠館の段」が特に貴重な作品なのだそうです。

さて、映画のストーリーの方ですが、原田さん演じる主人公「善」を中心とするドタバタと、歌舞伎のこれまた原田さんが演じ平家の落人「景清」の壮絶な悲劇という二つの物語がクロスオーバーして展開して行きます。

歌舞伎の花形役者である「善」は、18年前、女房の「貴子」に幼馴染の「治」と駆け落ちされてしまい、一人暮らしをしています。

歌舞伎公演を5日後に控え、村人が練習しているところに「貴子」と「治」が戻って来ます。しかも「貴子」は、認知障害のために夫の「善」の顔さえ分からなくなっていたのです。「善」「治」そして「貴子」の三角関係が再燃す

るという悲劇が始まるはずなのですが、これが妙に喜劇的で笑えるのです。

歌舞伎の方は、極々簡単に申し上げますと、平家の落人「景清」が頼朝やその家来達と戦うのですが決着がつかず、ついに「仇も恨みも、是まで、是まで」と闘うのを諦めます。そして、源氏の世は目にしたくないと両眼割り貫き、日向の国に落ちていくというものです。

さて、歌舞伎の本番、いよいよクライマックスを迎えたとき、ひと時正気に戻った「貴子」が舞台の袖から、「景清」を演じている「善」に向かって夫を裏切ってしまった自分のことを「許さなくて良い」とつぶやきます。それを聞いて「善」は「景清」の台詞「仇も恨みも、是まで、是まで」と見得を切ります。

「善」はちょっと間の抜けた悲劇の主人公であるのに対して、「景清」の方は義に準じる騎士というように、役どころ、性格は全く違うのに、最後は重なり合って見えてきます。その絶妙さが何ともいえません。

本当は、どろどろとした悲劇のはずなのに、喜劇にすり替わっています。でもそれは、他人の不幸や馬鹿さ加減を晒うというようなものではありません。

村人達は一人一人真剣に、一生懸命生きているのですが、少しずつ波長がずれているために可笑しさがこみ上げてくるのです。しかし、村人の思いは、大鹿村に残る300年の伝統、歌舞伎を守る力へと結実して行きます。大鹿村は、どっこい生きている。だから、「大鹿村騒動記」は、単なる喜劇でも、勿論悲劇でもない、心にしっかりと残るものに仕上がっているのだと思います。

主役を演じられた原田芳雄さんのご冥福を、心から祈ります。

(塾頭 吉田 洋一)